

柏原市遺跡群発掘調査概報

一大県遺跡・玉手山遺跡・田辺遺跡一

1987年度

1988年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市は大和川、石川、生駒山地といった豊かな水と緑に恵まれた街です。古代においては河内国の中心地であったことから、貴重な歴史的遺産が今なお多く眠る地であることも知られています。

1960年代の高度経済成長以降、大規模な宅地開発を中心とするあらゆる形での経済開発行為が全国的に活発に行なわれています。それに先立って実施する埋蔵文化財の緊急発掘調査の件数も当然のことながら増加し、それに比例して考古学上の発見が数多く新聞、テレビ等で取り上げられるようになりました。そういう「新発見」の増加は喜ばしいことではありますが、緊急調査という破壊を前提とした調査の性質上、記録保存という形でしか残せないことが多く、調査が終了すればその姿を永久に失ってしまうのが現状です。

人間もそうであるように、遺跡についてもその数ほどそれぞれに価値があります。そしてその価値は生きたままで永久に伝えなければならず、そこから未来に生きる知恵、力を学びとることが必要となるのです。

保存と開発は相反するものだと思われるがちですが、決してそうではありません。開発側のスピードに対応できず、保存側が後手に回っている現状を一刻も早く打破し、保存を前提とした保存の為の開発が可能となるような努力をしなければなりません。今後とも歴史的、文化的遺産に対する市民の皆さんの御理解、御協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

1988年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が昭和62年度に原作者負担事業として実施した発掘調査のうち、大県遺跡87-4次調査、玉手山遺跡87-4次調査、田辺87-3次調査の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査、整理、本書の執筆は、柏原市教育委員会社会教育課 森島康雄、石田成年が担当した。
3. 調査に要した諸費用は、それぞれの依頼者の負担による。
4. 調査の実施にあたり、次記の諸氏の参加、協力があった。

石田 博 松井隆彦 竹下 賢 奥川滋敏 北野 重 安村俊史
桑野一幸 谷口京子 藤中優香 竹下彰子 秋田大介 稲岡利彦
近藤康司 出口美佐子 飯村邦子 乃一敏恵 村口ゆき子 横関勢津子
吉居農子 (順不同・敬称略)

また発掘届出者各位には、始終絶大なる御理解、御協力を賜った。記して謝意を表します。

5. 本書で使用した標高はT. P. 方位は注記のない限り磁北である。

目　　次

はしがき

例　　言

目　　次

第1章	大県遺跡	87-4次調査	1
第2章	玉手山遺跡	87-4次調査	6
第3章	田辺遺跡	87-3次調査	10

図　　版

第1章 大 県 遺 跡

87-4次調査

- ・調査地所在地 柏原市平野1丁目125
- ・調査期間 1987年10月27日～11月5日
- ・調査面積 40m²／772m²
- ・調査担当者 石田成年

1. 調査概要

本調査はマンション建設に伴う埋蔵文化財事前緊急発掘調査である。

大県遺跡は生駒山地から西へ派生する尾根や開析谷によって形成された扇状地上に所在する縄文時代から脈々と続く大複合遺跡である。当該調査地は大県遺跡の北辺にあり、平野遺跡が北に接する。地形的には傾斜交換点からなおも西に細長く派生した小さな支尾根の南向き斜面にあり、標高は約20mを測る。現状は駐車場となっている。当該地隣接地では過去に数度の調査が実施されており、縄文時代・弥生時代の遺構、遺物の検出があった。調査は浄化槽予定地（調査対象地の東南部）に東西5m、南北8mの調査区を設定し、茶褐色砂質土上面までを重機により、以下を人力により最深で現地表下4.8mまで掘削した。なお調査に要した諸費用は依頼者である植田正雄氏の負担による。

註1. 『柏原市埋蔵文化財発掘調査概要報告 1980年度』柏原市教育委員会 1981年

『大県・大県南遺跡 下水管渠埋設工事に伴う一』 同 1984年

『柏原市所在遺跡発掘調査概報－原山・田辺・大県遺跡－ 1984年度』 同 1985年



図-1 調査位置図（方位は真北）

2. 遺構

当該地の基本層序は上から盛土、旧表土、灰色砂土、茶褐色砂質土、灰褐色砂質土、黒青色（砂質）粘質土、黒灰色砂質（粘質）土、茶青灰色砂質（粘質）土の順である。各々の層は水平に堆積する。灰色砂土から灰褐色砂質土にかけては弥生時代以降の各時代の遺物を含む包含層である。黒青色（砂質）粘質土は縄文晩期の土器を多量に含む。黒灰色砂質（粘質）土以下は土器類を全く含まない。

各層において遺構の検出に努めた。茶褐色砂質土を穿つ南北方向に走る溝状遺構を検出した。幅40cm、深さ15cmで中世以降の所産と思われる土器片を含む。黒青色（砂質）粘質土上面で拳大から人頭大ほどの石で構成される集石を検出した（図-4）。調査区の北端、東西1.5m、南北1mの範囲に広がるのみである。レベル的にはほぼ水平である。石の間や下に縄文晩期とみられる土器片が入っていることから同時期を上限とするものであることは知られるが、性格等については確たる証左を得ていない。

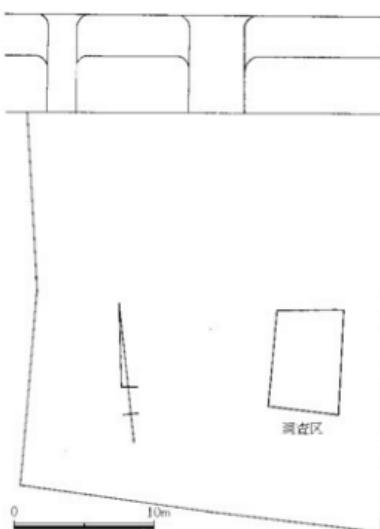


図-2 調査区位置図
ることから同時期を上限とするものであることは知られるが、性格等については確たる証左を得ていない。

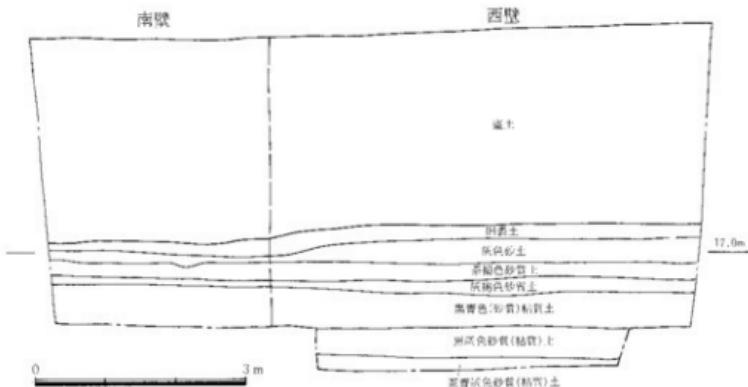


図-3 土層図

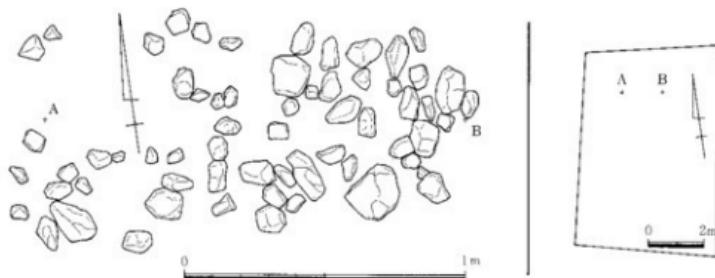


図-4 集石遺構

3. 遺物

遺物として縄文時代以降各時代の土器類の出土があった。前述のように弥生時代以降の遺物は灰褐色粘質土より上層に混在していた。縄文時代遺物のみ図示した。上器については細片であるものが多く、完形となるものはない。何れも黒青色（砂質）粘質土からの出土である。

1は深鉢である。復元口径31.4cmを測る。口縁部は直立するように伸び、端部上面は平坦である。体部には2つの段を有しそれぞれ口径よりも大きく張り出す。口縁部、段の下半はナデ、他は巻貝による水平方向の条痕調整を施す。体部下半については左上りの条痕調整。内面はナデ。色調は褐色で、胎土はいわゆる生駒西麓産のものである。出土土器には細片となるものがあつてあるが、口縁部は端部に刻目や沈線、凹線を施したものが多く見られる。4については口縁部の文様帶に朱を塗布していた痕跡が認められる。

石器類として石鎌（18）、削器（19）、楔形石器（20）、尖頭器（21）、石刀（22）、石皿（23）、磨石（24）、敲石があり、石核、剝片も加えると総数199点の出土をみた。主なものののみ図示した。18は無茎式の石鎌である。基部幅が広く、全長が短い五角形を呈する。基部の抉れは浅い。19は削器。腹面はほぼ一面自然面である。下縁の刃部には腹面、背面両面から加工を施す。この他にもう1点出土している。20は一部に自然面を残す。他に4点。21は尖頭器の未整品。右側刃刃部については比較的細かな調整が施されている。以上については全てサヌカイト製である。22は石刀の欠損品である。練泥片岩製で、丁寧に研磨されている。23は石皿であろうか。破片である為、形状は不明であるが、比較的大型の石材を用材とする。顯著な使用痕は認められない。24は磨石。半分を欠く。本来、径11cm前後の扁平の円錐であったと思われる。表裏両面とも顯著な磨耗痕が認められる。敲石としても使用されたようで、周縁部には敲打痕を残す。図示していないが、拳より一回り小さいチャートの円錐を素材とした敲石が1点ある。

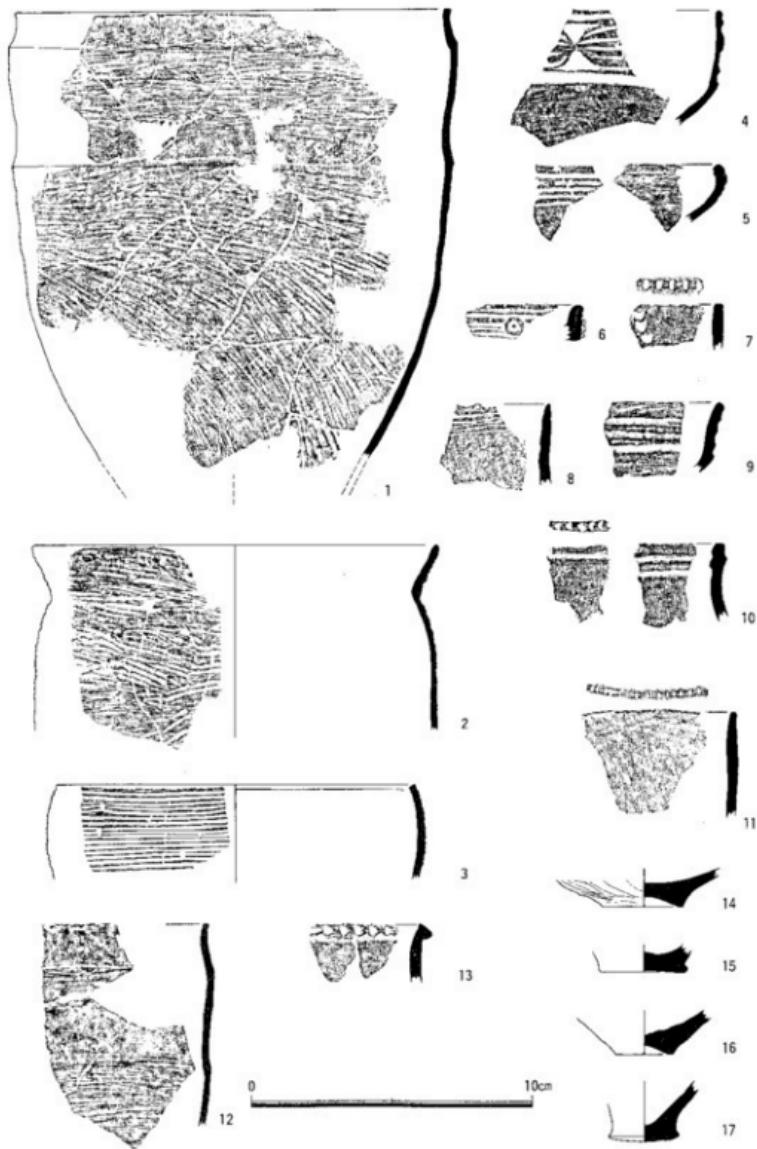
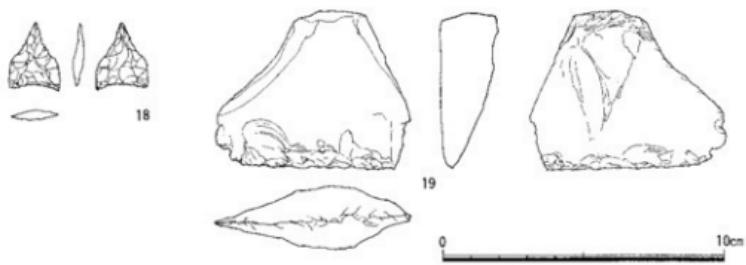


図-5 出土遺物 (1)



0 10cm

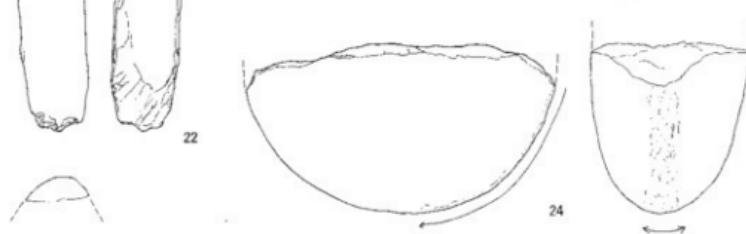
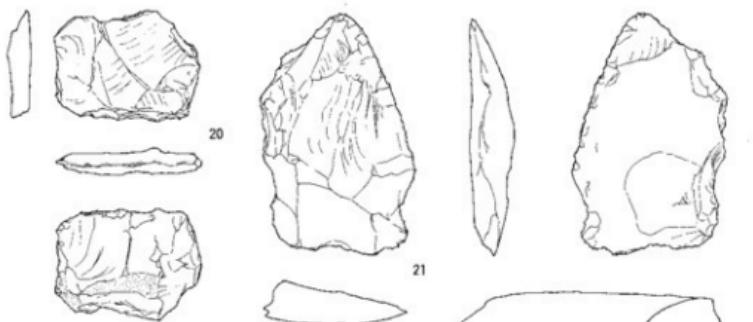


図-6 出土遺物(2)

第2章 玉手山遺跡

87-4次調査

- ・調査地所在地 柏原市旭ヶ丘1丁目568番地
- ・調査期間 1987年5月6日～20日
- ・調査面積 72／1030m²
- ・調査担当者 森島康雄

1 調査概要

本調査は、旭ヶ丘1丁目における宅地造成及びマンション建設に伴う緊急発掘調査である。1987年4月10日の試掘調査の結果、遺物包含層が確認されたため発掘調査を実施することにした。調査は、調査地西半の平坦地に12m×6mの調査区を設定して行なった。包含層やや上位まで機械掘削し、以下、人力掘削に移ったが、調査区東南部分は大きく攪乱を受けていることが判明したため、調査区東半を施肥地として、西半にしぼって掘削を進めた。調査の結果、遺

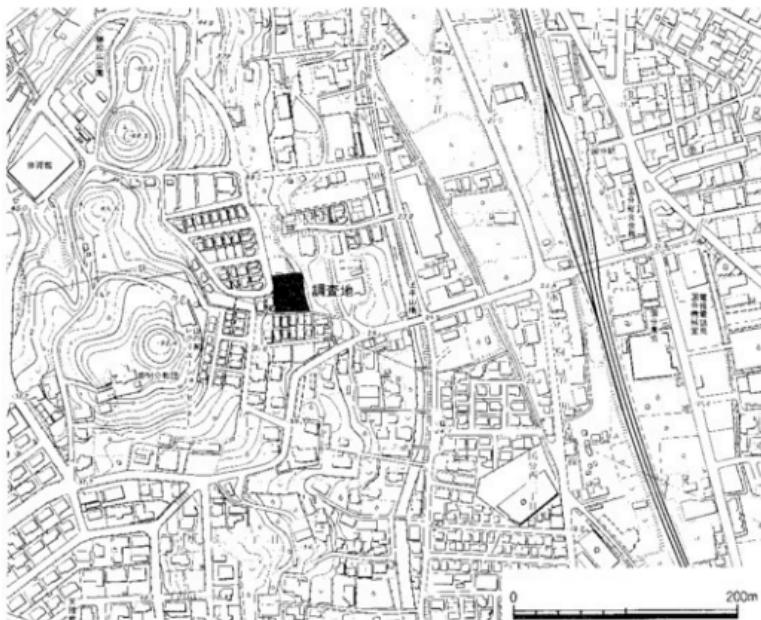


図-7 調査地位置図

構は検出されなかったが、赤生土器・石器などが出土した。なお、調査に要した諸費用は、届出者である松井正勝氏の負担による。

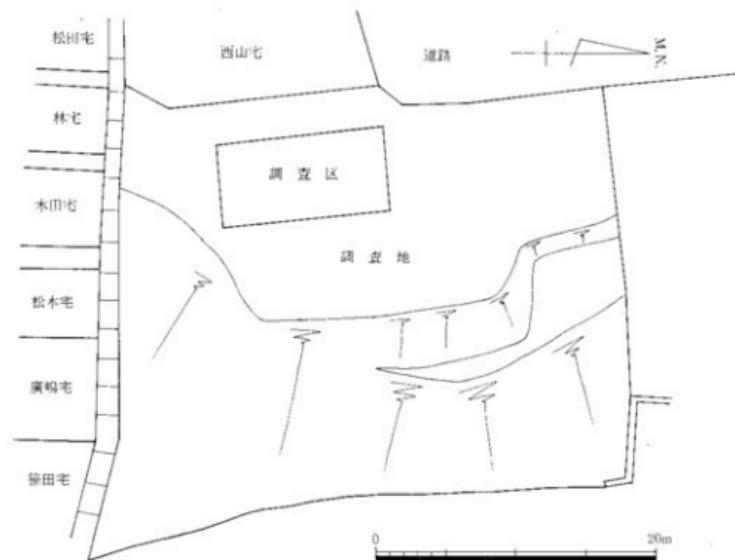


図-8 調査区位置図

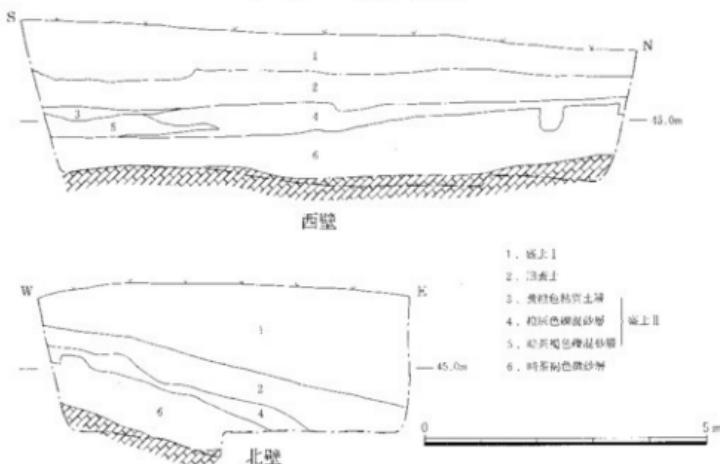


図-9 土層断面図

II 調査成果

1 層序

調査地の現状は荒地で、西半はほぼTP45mを測る平坦地であるが、東半は東に約25°の傾きで傾斜している。層序は上から、付近の宅地造成に伴う盛土I、かつて一帯がぶどう畑であった時の旧表土上、それ以前の盛土II、弥生時代以前の遺物を含む暗茶褐色微砂層となり、地山に至る。盛土IIは、黄橙色粘質土層（3層）、橙灰色礫混砂層（4層）、暗茶褐色礫混砂層（5層）よりなるが、3層は付近の地山を削り取った土と考えられ、遺物を含まない。4・5層は、古墳時代～奈良時代の遺物を含むが、近代以降の磁器片も含んでいる。

2 遺物

1) 土器

暗茶褐色微砂層から弥生土器が出土したが、量は少なく、保存状態も良くない。時期のわかる破片はすべて後期のもので、1・2のみが図化できた。1は壺の底部で、わずかにタタキが観察できる。2は高杯である。3～6は盛土IIから出土した須恵器すり鉢（3）・杯（4）・鉢（5・6）である。3・4は器面の磨滅が著しい。

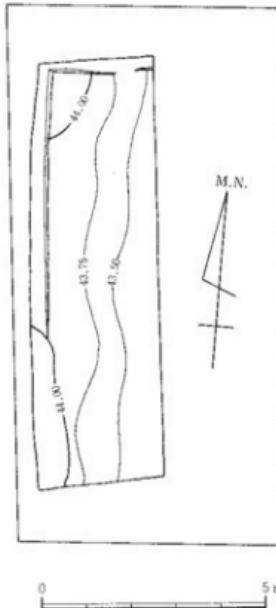


図-10 調査区平面図（地表面）

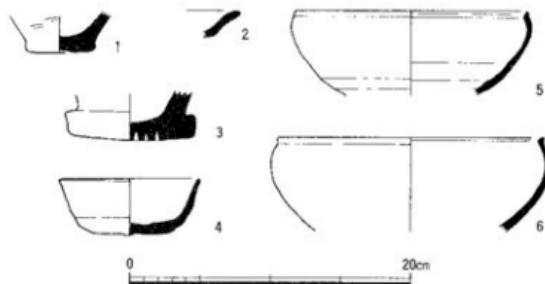


図-11 出土土器実測図

2) 石器

石器はすべて暗茶褐色微砂層から出土した。1～3はサヌカイト製の石鏃である。1は残存長1.4cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.5gを測る。先端を欠損している。2は長さ4.0cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm、重さ4.2gを測り、3は長さ4.0cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、重さ3.5gを測る。1は縄文時代～弥生時代前期、2・3は弥生時代中期のものと思われる。4はサヌカイト製の石匙。長さ4.9cm、残存幅5.3cm、厚さ0.8cm、重さ18.8gを測る。刃部の両端を少し欠損している。頂部の平坦面は原礫面を残している。縄文時代のものであろう。

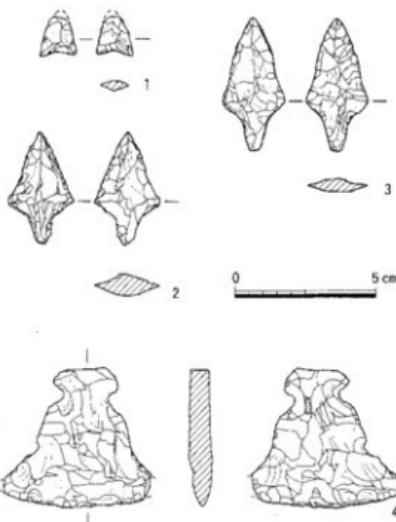


図-12 出土石器実測図

3まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の土器が出土した。調査地の位置する玉手山丘陵の東斜面においては、調査地の北約100mのマンション建設に伴う調査でも弥生時代後期の土器が出土している。また、南南西約400mの玉手山6号墳丘下から、弥生時代後期の住居址が検出されている。丘陵上には当該期の高地性集落が営まれていたものと考えられるが、今回の調査地は、遺物の出土量から考えて、その中心部からは離れているものと思われる。

*1 『本郷遺跡 玉手山遺跡－マンション建設に伴う－』 柏原市教育委員会 1985年

*2 『柏原市史』 第2巻 本編(1) 1973年

第3章 田辺遺跡

87-3次調査

- ・調査地所在地 柏原市田辺1丁目1324-1 他
- ・調査期間 1987年6月5日・6月6日
- ・調査面積 14m²/678m²
- ・調査担当者 石田成年

調査概要

八幸住建株式会社は柏原市田辺1丁目と分譲住宅建設を計画し、発掘届出書を当市教育委員会に提出した。教育委員会では協議後、調査依頼をもとに発掘調査を実施した。当該地の東南約100mに史跡田辺庵寺が存在することから、当初、比較的規模の大きな調査を予定していたが、実施予定日までに業者により既に盛土による造成、区画整理、排水管の埋設等が行われていた。その為、道路部の埋管をさける位置に調査区を設定せざるをえず、わずか14m²のトレーナによる調査にとどまった。

調査は、盛土部分を重機により、以下を人力により現地表下130cmまで掘削した。層序は上から盛土、旧表土、黒灰色土、橙黃灰色粘質土(地山)の順である。遺構として、橙黃灰色粘質土(地山)を穿つ南北方向の溝状遺構を検出した。幅30cm、深さ15cmを測る。

埋土は橙黄色土。



図-13 調査地位置図（方位は真北）



図-14 調査区位図

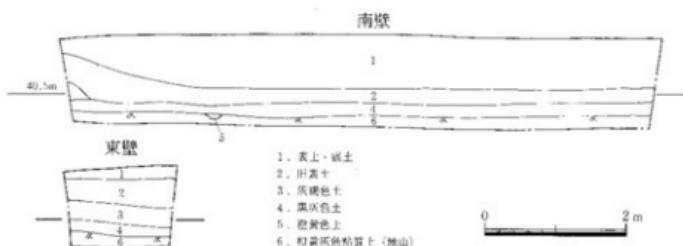


図-15 調査区東壁・南壁土層図

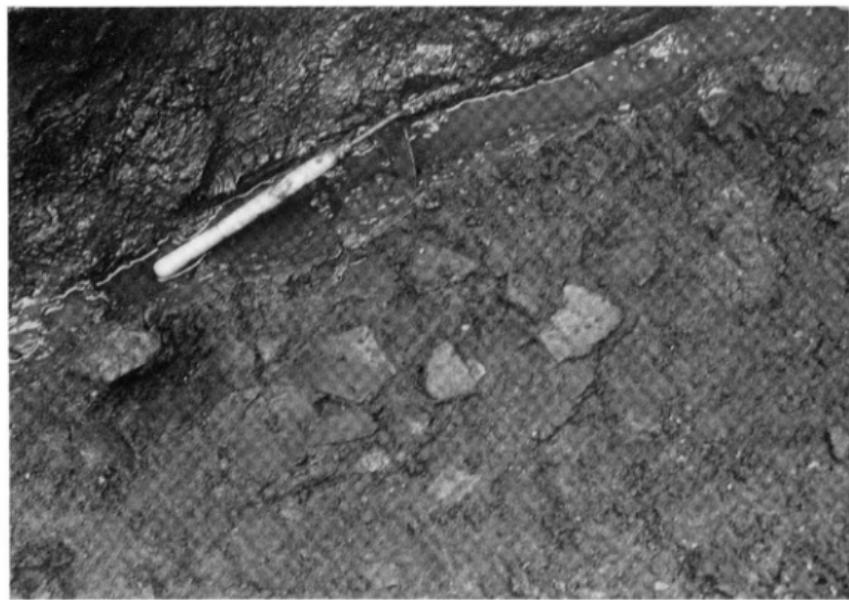
流れの方向は調査区が狭小であった為、確認できなかった。遺物については主として黒灰色土から須恵器、土師器の出土があったが、細片である為、図示できない。

調査に要した全ての諸費用は依頼者である八幸住建株式会社の負担による。

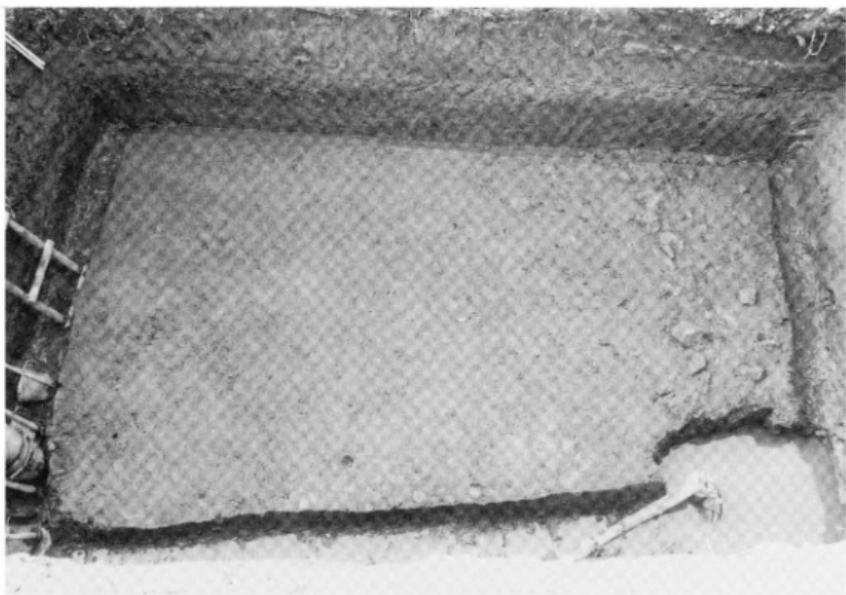
図 版



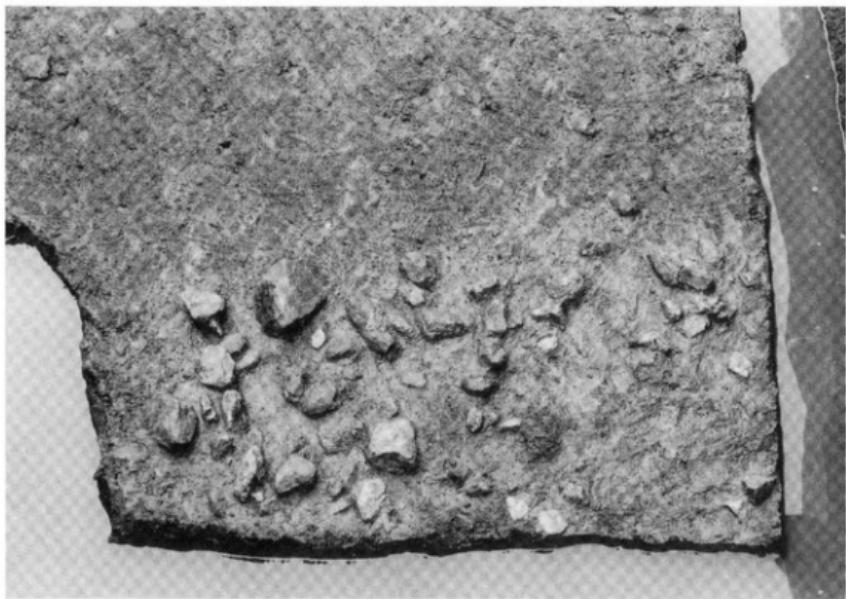
作業風景



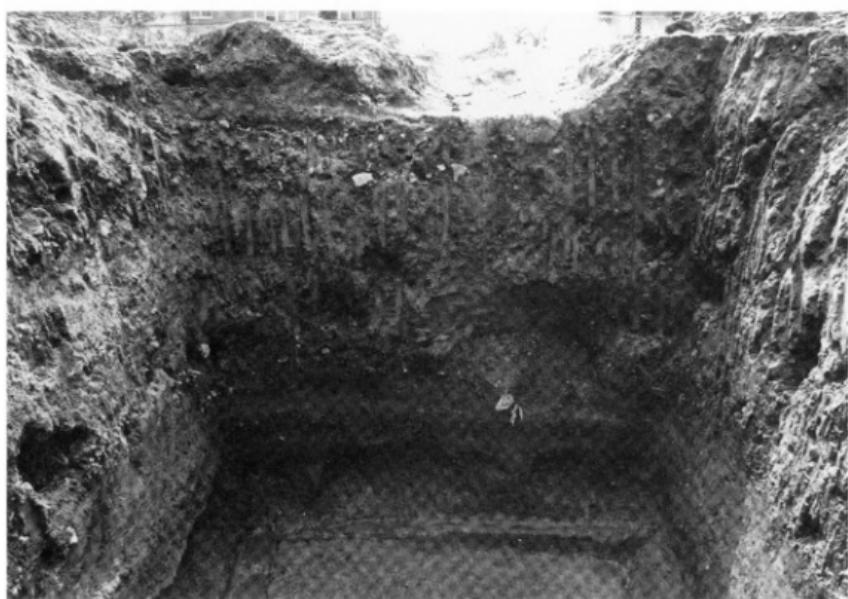
遺物出土状況



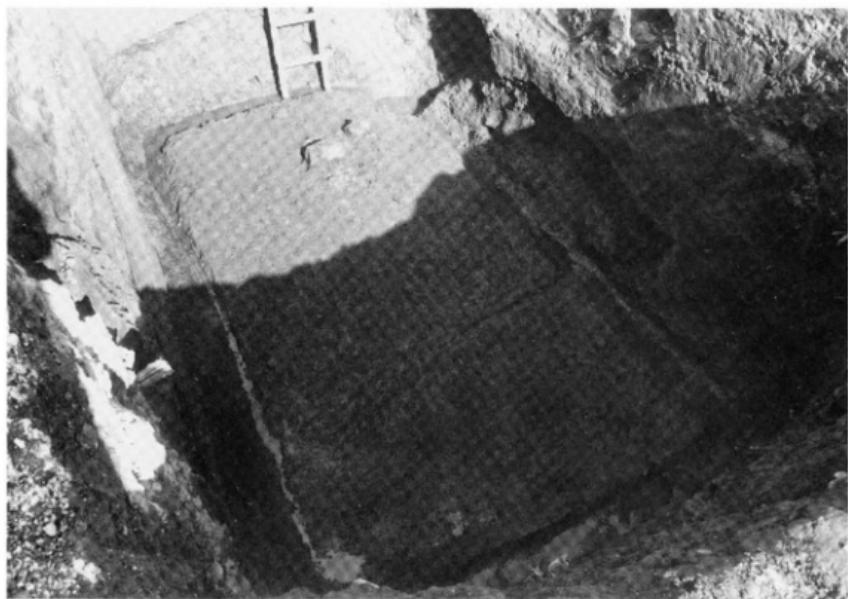
黑青色粘質土上面



集石遺構



南號土層



黑灰色砂質土上面



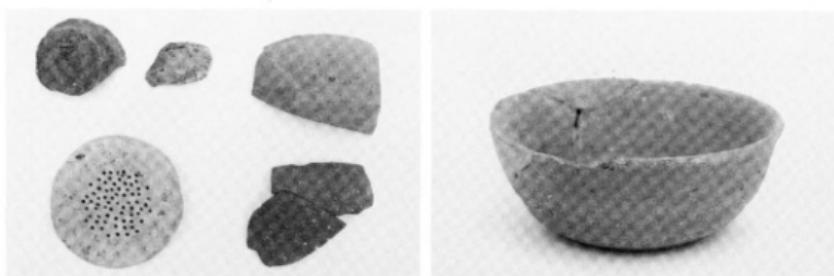
出土遺物



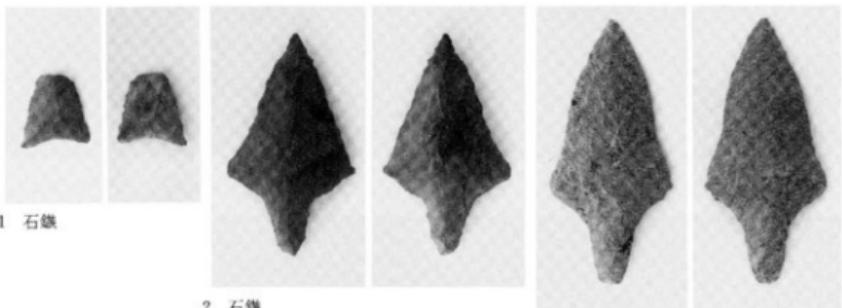
調査地より南西を望む（右奥が二上山）



地山面（南から）



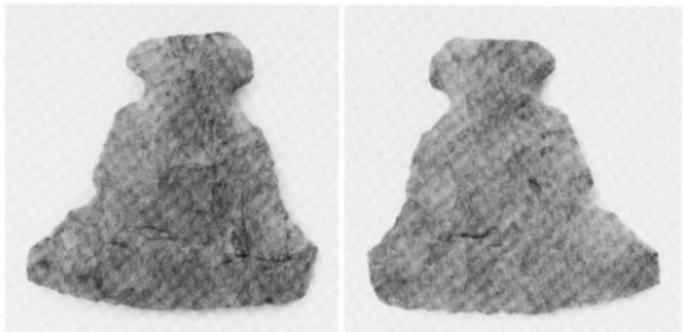
出土土器



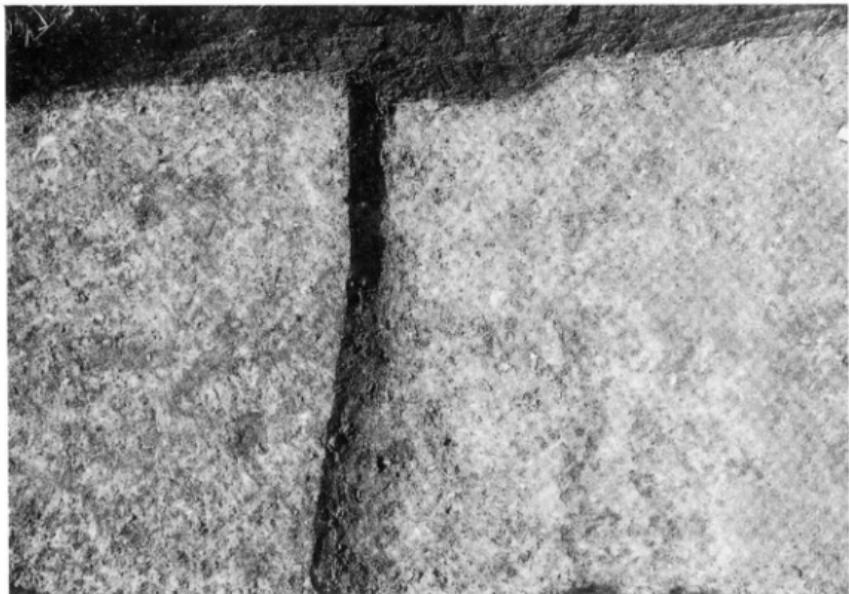
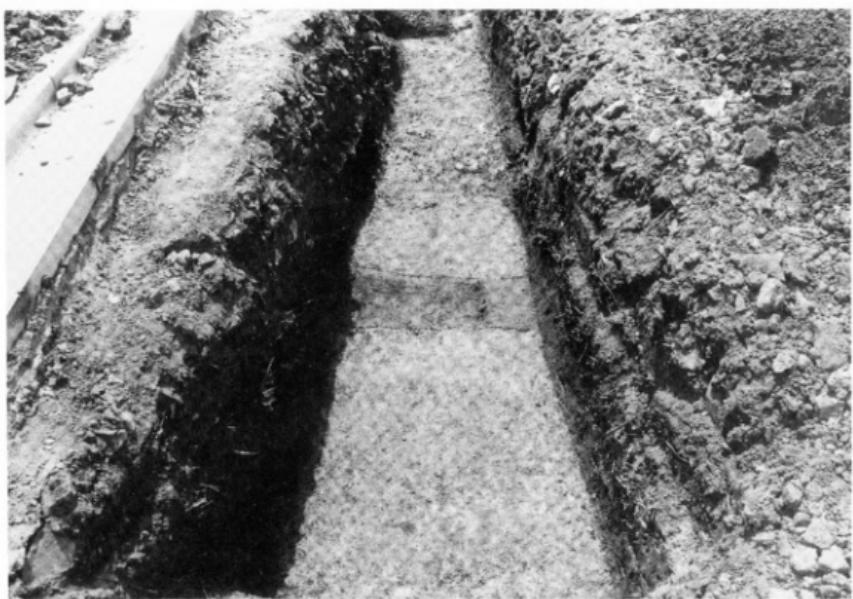
1 石鏃

2 石鏃

3 石鏃



4 石鉞



柏原市遺跡群発掘調査概報

1987年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 0729(72)1501 内 716

発行年月日 1988年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

1920-1921

1921-1922

1922-1923

1923-1924

1924-1925

1925-1926

1926-1927

1927-1928

1928-1929

1929-1930

1930-1931

1931-1932

1932-1933

1933-1934

1934-1935